様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３０日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２００２０
研究課題名（和文）　「語り」の実践を基軸とする生命倫理の探求

研究課題名（英文）　An Inquiry into the Method of Bioethics from the Viewpoint of Narrative Practice

研究代表者
八幡　英幸（YAHATA　HIDEYUKI）
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：70284718

研究成果の概要（和文）：本研究は次のことを明らかにした：生命倫理において重要な役割を果たしてきた普遍主義の倫理は、「同種の事例」と「種類の異なる事例」との区別を必要とするが、そのような区別は広く共有された世間知、人間知の蓄積に依拠している。そのような蓄積は、ある種の快の感情に導かれ、いくつかの偶然的なものを包摂する新たな秩序を生みだす物語や判断力の機能なしには生じない。普遍主義の倫理とこのような営みとは一見異質に思われるが、実際には前者は後者によって支えられている。

研究成果の概要（英文）：This inquiry shows: while ethical universalism, which has played an important role in Bioethics, requires the distinction between the cases 'of the same kind' and 'of a different kind,' this distinction depends on the accumulation of the widely shared knowledge of the world and the human being. Such accumulation is impossible without the function of narrative and the power of judgment, which is led by a kind of the feeling of pleasure and creates a new order that subsumes some contingent elements. At first glance, ethical universalism and such activity appear to be of different nature, but, in fact, the former is supported by the latter.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：規範理論、普遍主義、生命倫理、語り、判断力、思想史

１．研究開始当初の背景

(1) 20 世紀の規範理論の特質

20 世紀に大きな影響力を持った規範理論の多く（例えば、R・M・ヘアの功利主義やＪ・ロールズの正義論）は、普遍主義的かつ規則定立的である。すなわち、その提唱者たちは、役割交換の手続きを理論的に洗練されたものにすることにより、関係するあらゆる人に受け入れられるような普遍化可能（universalizable）な原則を見出すための方法論を

確立しようとしてきた。このような倫理学の方法論は、応用倫理学の一分野としての生命倫理学や生命倫理教育にも大きな影響を与えてきた。しかし、特に、研究代表者（八幡）が取り組んできた「人の誕生」をめぐる倫理問題を考えると、このような方法論にはさまざまな問題点があることが明らかになる（参考:「人の誕生をめぐる「語り」と道徳的思考―「不当な生」とその周辺事例を中心に―」（平成 18-19 年度萌芽研究））。

(2) その問題点

① 非同一性問題

生殖に関わる私たちの選択は、現在はまだ人格とは言いがたい胎児や受精卵、そして純然たる可能的存在である未来世代にも影響を与える。また、そのような選択の中には、未来の人格が置かれることになる状況を変えるだけではなく、一部の人格を消去したり、それを別の人格に変えたりするものがある。このことから、そのような選択の是非を考える際には、いったい誰の、どのような立場を考慮に入れればよいのかという問題が生じる（いわゆる非同一性問題）。この問題については、大きく分けると人格影響説と非人格説という二つの異なる視点からの対応が提案されているが、そのいずれにも一長一短があり、決定的なものとは言えない。

② 人格の個別性や人生全体の理解

また、このように不確定な未来の人格にまで役割交換の範囲を拡張していくと、人間の人格としての統一性や個別性が軽視されることになるのではないかという疑問がある。さらに、原則の普遍化を目指すアプローチでは、その時点で問題になっている事例と重要な点で類似した事例を一括し、そのいずれにも妥当する原則を見出そうとする。そのため、このようなアプローチを繰り返すと、それぞれの関係者が歩んできた人生の「流れ」は寸断され、全体としては理解されなくなるのではないかと危惧される。

(3) 別のアプローチへ

このような問題点を持つことから、役割交換に基づいて普遍化可能な原則を見出そうとする倫理学の方法論は、少なくともそれだけでは、生命倫理に本来求められる人間理解、他者理解に適した方法論であるとは言えない。そのため、本研究では、これを補うものとして、人格の統一性と個別性、人生の「流れ」などを重視する、もう一つの生命倫理のアプローチを開拓していきたいと考えた。すなわちそれが、「語り」の実践を基軸とする、他者理解に根ざした生命倫理である。

２．研究の目的

(1)【理論面】

本研究の第一の目的は、これまで理論レベルでは対立するように思われてきた、普遍主義的・規則定立的な倫理学と、人生の物語性に着目する倫理（例えば、Ａ・マッキンタイアの共同体主義）の関係を理論的に明らかにすることである。実践レベルにおいては、両者は相補的に機能することが予想されるし、またそうでなければならないと思われる（生命倫理においてはそのような提案がなされて久しい）が、正確に言って、両者がどのような点において相補的なのかということは詳しく解明されていない。

(2)【思想史面】

本研究ではまた、応募者が他の研究者と連携して同時に進めている判断力研究（「現代における判断力の思想的可能性の検討―カント判断力概念の包括的再考を通じて―」（平成 19-21 年度基盤研究(C)、研究代表者：小野原雅夫)）の成果を生かし、Ｐ・リクールらによって指摘されている判断力と物語の関係を中心に、「語り」を基軸とする生命倫理のアプローチの思想史的な位置づけを明らかにしたい。

(3)【実践面】

本研究はさらに、生命倫理の一分野において次のような具体的成果を生むと期待される。すなわち、本研究で開拓するアプローチによれば、出生前診断や選択的人工妊娠中絶の問題を例に挙げると、障害者、健常者、女性、男性、親、子など、この問題に関係する多様な人々の「語り」を聞き取り、書き記し、多面的に評価することになる。このような実践は、生命倫理に求められる他者理解を豊かなものにするだろう。

３．研究の方法

本研究においては、以上のような目的を達成するため、次の三つの面での研究を相互に関連づけながら遂行することとした。

【理論面】: 普遍主義的・規則定立的な倫理学と物語に着目する倫理との関係についての検討

【思想史面】: カントの判断力論を手がかりとした、「語り」の実践を基軸とする生命倫理の思想史的位置づけについての考察

【実践面】:「人の誕生」に関わる生命倫理問題をめぐる当事者の「語り」の収集・評価（萌芽研究からの継続）

研究の順序については、さしあたり以下のように考えた。すなわち、初年度（平成 21

年度）はまず、【理論面】の研究に重点を置き、それと関連づけながら、【実践面】の研究を同時進行させる。二年目（平成 22 年度）は、【理論面】の研究を一通り仕上げる一方、【実践面】の研究を継続しながら、【思想史面】の研究に重点を移していく。さらに、三年目（平成 23 年度）は、【思想史面】の研究と平行して【実践面】の研究を深め、これらとの関係で、【理論面】の研究にも必要な修正を加えていく。しかし、特に【実践面】の研究には、インタビューの対象者との関係など不確定要素が多いため、必要に応じて順序を入れ替えたり、四年目以降の研究継続を検討することとした。

４．研究成果

(1)【理論面】

① 論文「医療・介護／介助のシステムと人間の倫理」(『生命／環境の哲学』所収）では、「人の誕生」に関わる生命倫理問題に関連して、普遍主義的・規則定立的な倫理が限界に直面し、当事者の「語り」（研究代表者が収集したものを例示）を参照することが要請されるに至る経緯を明らかにした。

② 論文「倫理学における判断力の問題（序説）―普遍化可能性と特殊性―」では、倫理学上の普遍主義は、判断力の機能なしには成り立たないことを指摘した。判断力に期待されるのは、異種的なものと同種的なものとの区別である（この区別なしには普遍化可能性の原理は機能しない)。

③ 論文「倫理学における判断力の問題（続）―物語と判断力の関係を中心に―」では、 物語と判断力のあいだには密接な関連が存在し、それが私たち人間の自己理解を支えていることを明らかにした。両者に共通しているのは、異種的秩序の結合、偶然的要素の包摂、感情や身体との関連などである。

(2)【思想史面】

① 論文「判断力の自己自律―1780 年代中期のカントに生じた思想的転回―」(『判断力の問題圏』所収）では、物語との関係が指摘されているカントの判断力論について、その起源と意義を再検討した。カントの場合、判断がある種の快の感情（ア・プリオリな根拠を持つ）によって導かれることへの着目が、判断力に特有の自律の形（自己自律）を見出す上で大きな転回点となっている。

② 論文「生命の価値は実在するか―近代思想のメタ倫理学的回顧」(『生命という価値』所収）では、カントを含む近代思想をメタ倫理学の視点から回顧し、本研究（思想史面）に新たな視点を付加した。この視点は、着手時点では本研究に含まれていなかったものであるが、次の論文でさらに発展させられている。

③ 論文「人間学―道徳哲学との関係を中心に―」(『カントを学ぶ人のために』所収）およびこれを発展させた研究発表「カントの人間学をどう読むか」では、判断力論と深く結びついているカントの人間学について、規範理論とのあいだに強い緊張関係が存在し、これが現代の倫理学（特にメタ倫理学）にとっても重要な意味を持つことを指摘した。

(3)【実践面】

① 論文「医学的介入の論理と障害の概念―「何もしないより、何かよいことをしたほうがよい」か―」(『医療の本質と変容』所収）では、一部の生命倫理の議論（例示したのは J・ハリスの議論）の中に存在する狭く医学モデルに限定された障害観・疾病観を指摘する一方、当事者の「語り」の中に生命倫理のあり方の見直しを迫る契機が存在することを明らかにした。

② 地域の NPO の協力の下に実施してきた、出生前診断などの生命倫理問題に関連するライフ・ストーリーを持つ人（脳性マヒ、進行性筋ジストロフィー、ウェルニッヒ・ホフマン病、小児麻痺、パーキンソン病などに起因する障害を持つ人々）へのインタビューの結果を、報告書「Narrative Practice 2007-2010：障害を持つ人の誕生をめぐる「語り」」にまとめた。

(4)【その他】

今後の研究継続のため、本研究に関連するこれまでの論考（講演原稿、書評等を含む）を整理し、報告書「Studies on Bioethics and Narrative till 2011：生命倫理と語りの諸相―研究経過報告」にまとめた。今後はまず、新たに付加されたメタ倫理の観点もそこに加味しながら、【理論面】の研究の総仕上げを行いたい（「倫理学における普遍主義の再検討―物語論、判断力論の視点から―」（平成 24-26 年度基盤研究(C)))。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 八幡英幸、倫理学における判断力の問題（続）―物語と判断力の関係を中心に―、熊本大学教育学部紀要（人文科学)、査読無、60 号、2011、pp.17-26

② 八幡英幸、倫理学における判断力の問題（序説）―普遍化可能性と特殊性―、熊本大学教育学部紀要(人文科学)、査読無、59 号、2010、pp.141-149

〔学会発表〕（計 1 件）

① 八幡英幸、カントの人間学をどう読むか

―道徳哲学との関係を中心に―、カント研究会（第 256 回例会）、2011.12.18、法政大学（東京）

〔図書〕（計 5 件）

① 有福孝岳、牧野英二編、世界思想社、カントを学ぶ人のために、2012、pp.343-357（八幡英幸、人間学―道徳哲学との関係を中心に―）
② 高橋隆雄、北村俊則編、九州大学出版会、医療の本質と変容（熊本大学生命倫理論集 4）、2011、pp.146-160（八幡英幸、医学的介入の論理と障害の概念―「何もしないより、何かよいことをしたほうがよい」か―）
③ 小野原雅夫、山根雄一郎編、晃洋書房、判断力の問題圏（現代カント研究第 11 巻）、2009、pp.87-108（八幡英幸、判断力の自己自律―1780 年代中期のカントに生じた思想的転回―）
④ 清水哲郎編、岩波書店、生命／環境の哲学（岩波講座哲学第 8 巻）、2009、pp.131-149（八幡英幸、医療・介護／介助のシステムと人間の倫理）
⑤ 高橋隆雄、粂和彦編、九州大学出版会、生命という価値（熊本大学生命倫理論集 3）、2009、pp.3-17（八幡英幸、生命の価値は実在するか―近代思想のメタ倫理学的回顧）

〔その他〕

本研究に関連し、以下の報告書（印刷物）を作成した。

① 八幡英幸、Studies on Bioethics and Narrative till 2011：生命倫理と語りの諸相―研究経過報告、2012、126 頁
② 八幡英幸、Narrative Practice 2007-2010：障害を持つ人の誕生をめぐる「語り」、2011、158 頁（個人情報を含むため非公開）

６．研究組織

(1)研究代表者

八幡　英幸（YAHATA　HIDEYUKI）
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：70284718